

落したる事無くして、終に飛龍の業を成就し給へり、又義經没落して奥州へ下る一路主従共に鬱氣して力も脱落したるに、只辨慶のみ時々狂言を發して人を笑はせ、又は若輩なる口論を仕出して人氣を引立等して、危き道中を難なく奥州迄着したり、是ぞ辨慶の智識だけに、大切の所を能く吞込みたる故、此の如き狂言狂行を爲したるなり、一通りの勇僧とのみ思ふ事勿れ可貴。

## 海國兵談 第十三卷

### 操練

操練とは軍を出す時は言ふに及ばず、大平の時にも、人馬に軍の仕形を教へ置く事なり、異國にては周に是を治兵と言ひ、明に操練と言ふ、皆同事なり、日本の古は都に鼓吹司を置き、國々に軍團を置いて軍事を教へし事、史書に見ゆ、其外犬追物、牛追物又は戲道など、言ふ事も操練教旗の心持なり、孔子も以不教民戰是謂棄之と宣へり、然るに近世日本に操練の事絶へたり危しと言へし、其故は弓馬、鎗刀の小武藝たりとも稽古せざれば、其一藝不取廻しなるものなり、況や天下分目の大武藝を稽古無しに勤す事は不吟味の至りなるべし、大將たる人能々思惟あるべし、異國にては末世になりても、能く操練を致すと見えたり、其證據は大閩の朝鮮征伐は明の萬曆中にて其國數十年、太平續きたる時なれども、明より朝鮮へ加勢に來りし軍勢共其動止、駈引甚だ自在にして一身を使ふが如しとて、日本の諸將大に驚かれたり、又近世明和の頃、唐山、福州へ漂流して、三年にして日本へ歸りたる者の物語を聞きしに、南

京省に逗留の間軍の稽古を度々見たりと言へり、今の清も康熙以來幾百余年の静謐にして其上南京省は京師を去る事、四十日路の邊鄙なれども、右の如く軍事を棄てざる事、手厚き政にして羨むべき事ともなり、倭日本軍は操練もなく、軍法も疎なり、只國土自然の英氣に任せて其先鋒先鋭なるのみなり、唐山の兵と接戦せば一旦の勝利を得る共、久しく戦て位詰に逢へば軍法嚴重ならざる故、必ず瓦解して破るべし、兵を用ふる者此所を能く會得して、操練軍法を忽にする事勿れ、操練の仕形左に大略を記す、猶廣く考へて教ふべし、但し細かなる事に拘はらず、大筋を體に教ふべし。

操練するには先づ操練すべき場所を設くべし、大概大なるは方六七里六町一里なり、小なるは五町十町許なるべし、國の大小、人數の多寡に隨ふべし、是を大馬場と言ふ、但し此大馬場は總人數を集めて、大操練する所なれば、一年に二度致すべし、八月其餘の小操練は末卷に圖する大學校の内にて教ふべし、末卷に記せり。

第八卷目に言へる所の押前陣取の次第、又は野陣の張り様などを教ふべし。

次に總軍兵陣屋に居る時、陣觸れの趣を操練すべし、其仕方、薄板へ明何日、何の刻、何方へ出陣と書す、但し出陣の宛所を除く事もあるべし、此札を三尺計の竹に挟みて

幟りの如くするなり、右の幟を本大將より一札を三人宛に持せて番頭へ遣すなり、但し番頭七組ならば、右の札を七枚拵へて、一頭へ一札宛遣すなり、勿論他の者直に番頭に對面して相渡し扣へ居るなり、其時番頭自筆にて姓名承ると書て、別に使者を仕立て手下の百人頭へ遣すなり、其時百人頭自筆にて書付る事上の如し、但百人頭幾人ありとも、番頭の使者持廻るべし、段々持廻りて打止の百人頭より持返りて、大將の使者へ返すべし、大將の使者是を持歸りて直に大將軍へ納むべし、偕百人頭は各右の札を寫し取て、手下の小組頭共を呼ひ集め、右の札を見合せて、其札へ受書をなさしむべし、小組頭は又其札を寫して持歸り、手下の主立五人を呼集て、右の札を貸與ふべし、五人の主立右の札を借歸て、面々の組合、四人の軍士共、詰ては双方睨合つて此間語り兼るものなり、其時は居敷て弓鐵砲を連ね、撥大鼓をば三拍子の頭付を打て、早大鼓に直せば、士卒無二無三に矢烟の下より敵隊へ飛込むなり、軍法の卷にも言へる如く、頭付の大鼓を聞ても進まざる者をば、其頭竝に監軍能く、見覺へて言上し、戦ひ濟で後斬て棄つべし、但し馬上大鼓なるべし、鞍の左の居木さきへ太鼓を縦に結付て馬上にて打べし。

次に押行體を教ふべし、然しなから押前は人數の多寡、大地の險易に因て次第不同

なるものなれば一概には言難し、只行列を亂さるる大小便を便し、草鞋等を着替る等のあらましを教ふべきなり。

次に押行道中にて敵に出合ひたる時の働を教ふべし、總て押行一路も前後左右の物見を用ゆべし、搦東の方に敵ありと物見より注進あらば、旗本にて鉦を鳴らして、押行人數を止むるなり、其時總人數居敷て旗本の下知を待べし、敵の有無を諸軍へ通ずるには、前に記す如く旗を用ふるなり、其仕形は第七卷目に言へる所の趣を教ふべし、搦居敷て旗本の下知を待つて敵に懸る定法なれども、敵勢無二、無三に突懸らば旗本の下知を待つに及ばず其出會たる備直に取合て合戦すべし、尤遊軍後を誥るが、横を入れるか爲すべし、他の備は妄りに動搖せず、各方角に向て居敷居て、旗本の下知を待つべし、下知なき前に少も動く事なかれ。

次に押行道中に兩方より敵の見ゆる躰を教ふべし、三方四方皆同然なり。次に押行人數を鉦を鳴して押止る事を教ふべし、其比先づ旗本足を止て鉦を鳴す時は、先陣は行過ぎ後陣は押懸りて難儀に及ぶなり、此故に人數を押止めんとする時は、押行乍ら鉦を五聲打可し、其時諸手も鉦を鳴して應ずるなり、鉦を打つ法は一呼吸に一聲打べし、搦六聲目に旗本の足を止め、其外も聞付次第、足を止むる時は先

陣過ぐる事なく後陣押懸る事無くして行列調ふなり。

次に敵味方備を押し出して大拵合の躰を教ふ可し、其次の懸り口に六あり、悉く陸戰の巻に出せり、其趣を以て操練すべし、就中大切の操練なり。

次に敵を踏破りて追行時の事を操練すべし、是又陸戰の巻にあり。

次に味方敵に追立られたる時、二の見より横を入るる躰を操練すべし、是又陸戰の巻にあり。

次に馬入の躰を操練すべし、馬入に三法あり、是又陸戰の巻にあり。

次に敵より馬入をするを喰止る躰を操練すべし、是又陸戰の巻にあり。

次に長柄備の立様を教ふべし、是又陸戰の巻にあり。

次に大砲の打様又大砲を放戦に用ふる躰を教ふべし、二つ共に陸戰の巻にあり。次に城攻の法を教ふべし、就中仕寄の態、仕難き物なり、悉しき事は城攻の巻にあり、就中居敷ながら仕寄る態を教ふべし。

次に守城の諸法を教ふべし、法は籠城の巻にあり、總て城攻籠城の二條は事多き事なれば能く心を配つて教ふべし。

馬を教ふる事は十五卷目、馬の條下に詳かなり。

右の外、楯の持様、虚敗の仕様等、了簡次第教ふべし、猶此外に軍中の禮式あり、閑暇の時教ふべし、總て軍の巧拙は此操練にあり、忽にする事忽れ日本の軍は操練なき故無法の軍多し、大闇の猛威と雖も、朝鮮に於て明軍の堂々正々たるに仰天したる事あり、此外和漢の軍立の精粗の様子、諸軍記を見て知べし、皆操練するとせざるとにあり、孔子の以不教民戰是謂棄之と宣へる事能味ふ可し、扱唯今太平の世の人に甲冑着て奔走せしむる時は肩を引かれ、身節痛んで一里も往來仕難きものなり、然る故に操練の度毎に甲冑を着せて終日奔走せしむる時は、度重て自然と甲冑に馴る、故肩も引かれず、身節も痛まず、足も重からず、息も切れず、後には二三日甲冑を脱がずとも、さのみ身體も疲れざるものなり、此所操練の妙なり、能々心を用て教ふべし、然るに當時太平の化を蒙る世に居て、此等の言を吐出す事實に多罪なり、然れと初より段々言ひし如く、日本は海國にて而も隣國多き地勢なれば、只外國の變の爲に如此教置べき事、兵家の持前なるべし、當世武備と言ふ事は人々口に絶えず言ふ事なれども、皆虚談にして實用なし、危きの甚しきなり、武備と言ふ事を知らざるには劣れり思ふべし。

### 第十三卷終

## 海國兵談 第十四卷

### 武士の本體竝知行割、人數積、附制度法令の大略

武士の本體は當世の百姓と異なる事なし、其故如何と言ふに、古の武士は皆土着したり、其中にて土地を多く持たる者は譜代の家の子郎黨を多く扶助し、軍陣に出るには郎黨は言ふに及はず、百姓をも軍兵に仕立て召連たる故、五千石、一萬石の領主にても五百人も千人も出したる事なり、信濃の木曾、上野の新田、信濃の名和、肥後の木山等皆土着の大身士にて、急に臨で軍兵を出したる所業人々の知る所なり、扱又小祿の武士は手自ら農作して作り取にしたる故、二、三十石の地を所持しても馬をも持ち、武具馬具等も面々の心懸にて事缺かざる様に嗜むる、なり、農作する故手足あられて丈夫なり、鹿狩、魚獵等を樂とする故、筋肉壯健なり、遠方の親戚、朋友と往來する故、遠路に馴れて疲れず、平日糲食短褐に口腹身體を馴らす故、軍陣に出ても此二つに苦まず、大概古代の武士の形勢如此なるものなり、然るに近來天下一統に武士が城下に住居するものと成りて城下に群居する故、自然に衣服、飲食、家作等を